婦人と新社會

山田わか主筆

新年號

毎月一回一日發行　第拾壹號　大正拾年壹月壹日發行

東京 婦人と新社會發

山田わか女史著

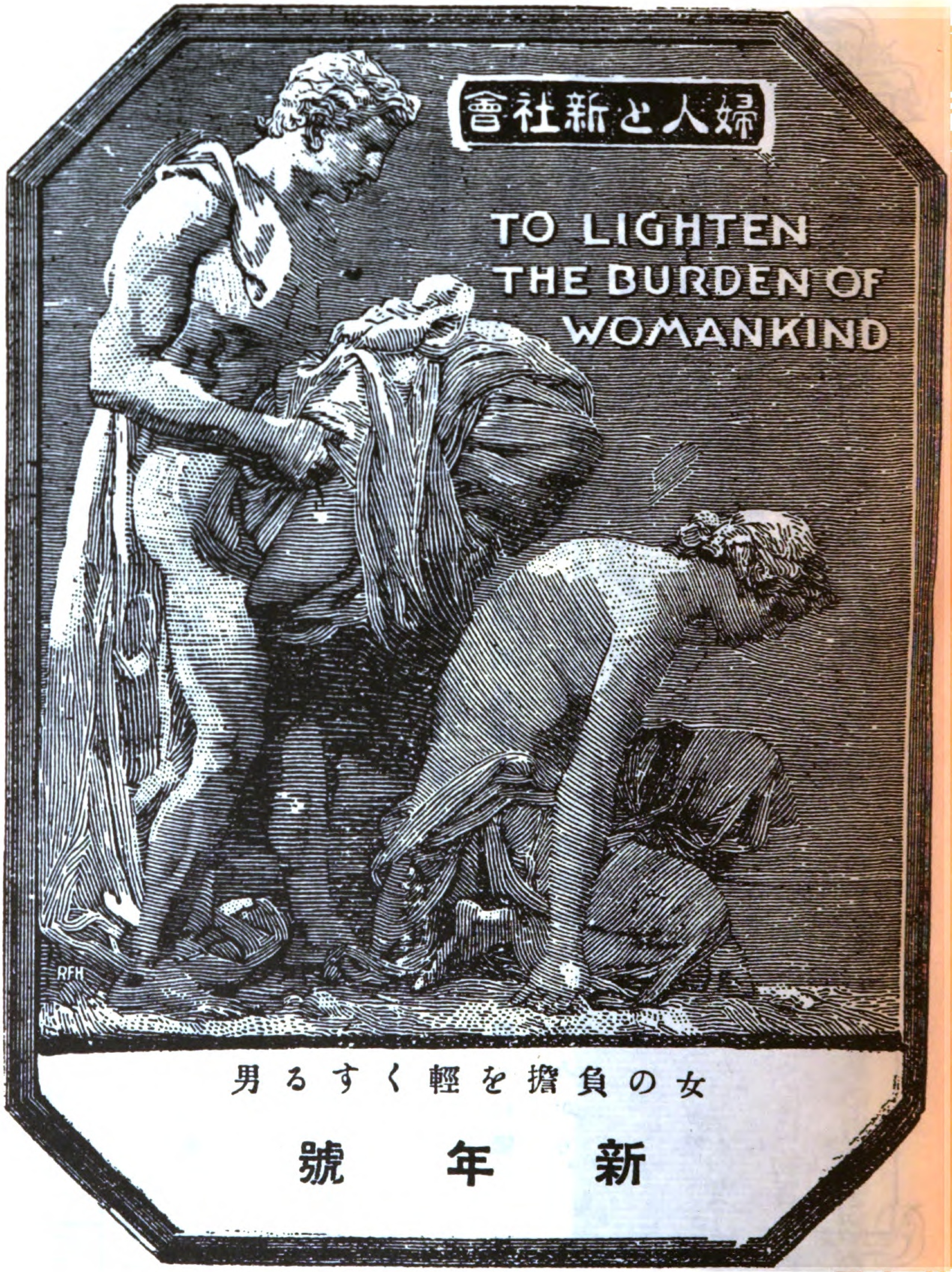
女人母

最新刊

四六版本製
三百五十頁
裝禎美裝
正價金壹圓七十五錢
遂料八錢

『家庭の危機』以下二十五編悉く女として人として母としての自覺を經とし、わか子さん一流の自然な文章と天眞爛熳な表現とをもつて家庭生活の高調を緯とし、婦人勞働、女子教育及び戀愛と結婚を最も健全な人生觀、則ち社會學的見地から織り込んだものが此の新著である。最も進步した婦人觀、則ち、婦人の立場から此の文明批評は確かに不健全にして有害な多くの婦人論を一掃するに足るものである。

發行所
東京市本郷區春木町二丁目
振替東京八貳壹九番
森江書店

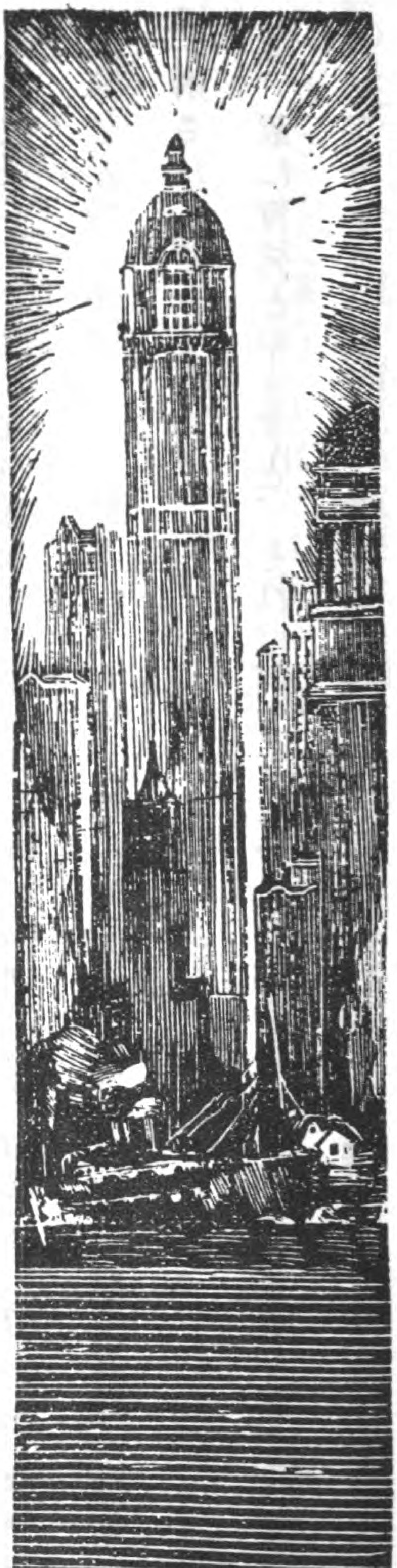

婦人と新社會
TO LIGHTEN THE BURDEN OF WOMANKIND
RFH
女の負擔を輕くする男
新年號

捨てゝ置けば忽ち呼吸が絶へそうないくぢのない赤子に胸をひろげて乳房を含ませた第一の女が凡ての文化の母であります。

自然は母と子に親密な關係を造つて置いたことによつて、女性の心に利他主義の芽を植へつけました。

何代も〳〵の間母達が其の利他主義を實行した、優しい犠牲を拂つたことによつて人間は盲目な無意識のくらやみから、明るい有識な光りの中へ躍り出ました。

世界平和の基礎となる利他主義の源は母にあります。女權の復興とは母性の復興の別名でなければなりません。



母性の革命

どんなに立派な議論があつた處が、婦人の權利がどんなに完全に確立された處が親や敎師の云ふことを聞かない、少しも本能を敎育されてゐない子供が續々と各家庭から社會へ流れ出て來る以上は社會は斷じて改良されません。

母が無思慮で幼兒のシツケと云ふことをしない結果は、つまり、子供の本能の敎育を怠つてゐる結果は、子供は母の膝を離れるようになるとすぐに第一に障子をひきさきます。障子を自由にひきさかせて、ものを大切にすること、責任と云ふことを敎へ

ない結果は、長じては親の公債をひきさきます。親の公債をひきさくような人間が國家的のことに勢力をもつようになるならば其の人間は國家の基礎を崩します。子供の時に弱い者をいぢめたり、召し使ひを平氣で苦しめたりする人は必ず壓制家になります。

三ッ兒のたましひは百迄です。そして、その三兒のたましひを造るものは自分の血、自分の骨、自分の生命をもつて子供を創造する婦人の責任であります。同時に婦人が其の責任を全ふするためには物質上精神上婦人を苦しめてはならない、それが男子の責任です。

私の主張する母性尊重の意味は少なくとも私の讀者には了解されて居りますが、新思想家をもつて任じて居られる、そして、單なる男女平等を主張される女權主義者には了解されて居りません。

唯、單に育兒と申ますと、それは何でもないようであります。犬も猫も育兒の業を營んで居ります。何千年の間無智無學な全く奴隷的な女も子供を育てゝ來ました。で

ありますから、私が育兒の重要を高調致しますと人は直ぐに在來の育兒法を想像しまして『それは奴隷的な仕事ではないか。』と云つて喰つてかゝります。

けれども、其の奴隷的の仕事を人間的の仕事にしなければならないと云ふのが私の主張です。

新文明は人間の質が變らないことには生れない。人間の質を變へるには育兒の方法を變へなければならない、育兒の方法を變へるには育兒に對する考へを變へなければならないと云ふのが私の主張です。

子供を理想的に育てようと思へば古今東西の智識を皆あつめたとて充分でありません。皆あつめても足りない其の智識を百分の一も今日の婦人はあつめて居りません。

機械の發明は大規模の產業を可能ならしめて家庭に於ける婦人の勞力をはぶき、婦人に餘裕を與へて人の母として遜色のない婦人を造らうとする使命をもつてゐます。婦人は其の餘裕をもつて智識をあつめ修養を積み育兒を完全にすることによつて人たるの本分を盡し得るのであります。

けれども、女權主義者は、家庭内の仕事が工場へ行つたから、婦人は家庭を出て工場へ仕事を追ひかけて行かなければならないと主張します。家事育兒は奴隷的の仕事である。職業が人間らしい仕事であると叫びます。

家庭に於ける育兒をつまらない仕事として、經濟的の仕事が人間らしい仕事であるとして『婦人の經濟的獨立』などゝ云ふことが主張されるのでありますが、一體、人を造ることゝものを造ることとどちらが重要であるでせうか？　ものを造ることは人を造ることの單なる一つの手段ではないでせうか？

育兒と云ふことは唯單に着せて食べさせてせたけを伸ばす計りのものではありません。又、敎育と云ふことは學校へやりさへすればいゝと云ふものでもなく、學校の成績がよければいゝと云ふものでもありません。唯、せたけを伸すだけなら犬猫でも子供を大きくします。唯、機械的に智識を授けて成績がよければ人としての成功だとするならば、高等敎育を受けた人々の中から惡人は出ない筈です。育兒、又は、敎育と云ふことが唯そんなようなものでも差し支へないものならば子供は托兒所へでも何處

へでもあつめて集合的に育てたり教育したりすればよろしい。けれども人間らしい人間はそれでは出來ません。托兒所の有害ことに付いては五六年も前から私は指摘して居りましたが、托兒所は其の後あちこちに造られました。そして、其の弊害は實證されつゝあります。內務省社會局の鈴木誠治氏の托兒所の失敗談が『兒童の一生を通じて托兒所の惡印象』と云ふ題で十二月四日の國民新聞に出て居ります。

子供を托兒所に預けて迄女權主義者は婦人に經濟的の仕事をすゝめて來たのでありますが、併し、其の經濟上の獨立と云ふことが、共同を基調としてゐる此の社會組織をもつてゐてどうして可能でありませうか？　昔の自給自足で立つてゐた農夫こそ或る程度迄の獨立を持ち得たかも知れませんが、其の農夫ですらも今日に於ては、東の果てに住んでゐて西の果てに起つた出來事の影響を受けるではありませんか。他は押して知るべしであります。ですから、口では何と云つた處が、現代の生活は獨立（インデペンデンス）ではなく、相互依屬（インターデペンデンス）であります。所詮現代人は他人のために働き、又、他人から働いて貰ふ、つまり、頭の人、手の人、筋肉全體を働かす人と、私共の生活に必要なもの

を分擔して造るのです。そして、それが最も有効な方法なのです。
そんならば、ものを造るに適した男子がものを造り、育兒の業に適した婦人が人間を造ることは最も自然な、そして、有効な方法ではないでせうか。

ものはどんなに大規模にどんなに集合的に製造しても差支へありません。けれども精神的動物である人間の製造則ち育兒は大規模に集合的にすると品質が全く劣つてしまひます。品物同樣に扱つてはならない人を造るには其の一人々々に心血を注いでやることの出來る親の愛が必要である、言ひかへれば、一人々々に創造者が必要なのであります。そして、その人間の創造は今日迄の愚母のように愛情を亂用し、妄用し、玩弄視してゐてはならないのであります。

そして、人を造る、則はち子供を育てると云ふ、人類のためにも社會のためにも重要な仕事をしてゐる婦人に物質上報ゆる處がなければならない、それが男子の又は國家の當然な義務であります。母性保護と云ふことは、唯單に食ふに困る母に物質を供給する計りではありません。母性の作用の重用なこと、社會に及ぼす其の價値を認め

て、あらゆる方面から婦人に母性の作用を圓滑に營ませることであります。現に又不完全ではありますが政府の仕事の半分以上は既でに殆んど母性擁護であると云ふことが出來ます。

生殖作用は男女共同によつて營まれます。けれども、男子は父となるために生理的には日々の生活には何等の干渉も受けない程其の役目は簡單です。けれども、女子が母となるためには前にも云つた通り、自分の血、自分の骨、自分の生命をもつて子供を創造するのです。ですから、ウォードは『婦人は種族其のものである。』と云つてゐます。其の婦人が目前の自分の利益に計り心を奪はれて子供を等閑にしてゐるようなことでは到底人類の改造は覺束ない、人間其のものが改造されなければ社會は改造されないのであります。

けれども、たとへ、婦人にどんな確實な考へがあつても、前にも云つた通り、人の精力には限りがあるものですから、人類にとつて最も大切な次代創造の業に當つてゐる婦人は男子から物質の供給を受けなければなりません。

今日迄にも婦人は男子から物質の供給を受けてゐました。けれども、育兒の意義、及び其の價値を男は勿論女自身も忘れてゐたので、ツイに物質の供給者、則ち男子が恐しい權勢を有つやうになり、物質の受給者則ち女が全く從屬的な奴隸の狀態に陷れられてしまつたのであります。そして、子供の保護、及び男子及び家庭への婦人の奉仕が全く盲目的になつてしまつたのであります。

其處で、私の意味する女權の復興は、ものを造ることに最大權威をもたせてゐた其の見方を立て直して、人を造ることに最大權威を與へよ、云ひ直せば、母の仕事の價値を認めよと云ふのであります。同時に、母性革命の必要を主張するのであります。

往時、子供を生み育てるために女が身動きさへ出來ずにゐた時に、男は其の女と子供の衣食を得るために敵と戰つたり、危險を冒したりしました。男がさうして働くので妻には幾分の餘裕がありました。彼女はつかれて歸へる夫を氣持ちよくやすませるためにホッタテ小屋を造りました。これが建築學の土臺だと云ひます。妻は自分のために働いて吳れる夫をなぐさめるために花を摘んでホッタテ小屋の中を飾りました。

粘土をとつて器を造り、後には其れに意匠をほどこすようになりました。これが最初の藝術です。

彼女は怪我をして歸つた夫の疵を癒してやるためにあらゆる工夫をこらしました。これが醫術の始まり、人道の芽だつたのであります。

進歩の母は餘裕であります。元始時代の物質を得るに忙しかつた男子には餘裕がなく、併し、其の男子があるために自分に餘裕のあつた女子が藝術の芽をはぐゝみ學問の基礎を造りました。

けれども、其の後の文化の大部分が男の手になつたものであると云ふことは、女子の生活に餘裕が無くなり、其の反對に男子が多くの餘裕を有つてゐたことを語るものだと私は考へます。そして、男子の造つた文化の結果が此の呪ふべき不具的な文明なのであります。

其處で、此の不具的文明を造りかへるには婦人が男子の模倣をしてはならないのであります。けれども、今日一般に稱へられてゐる女子の自覺とか、又は、獨立とか云

ふことは女子の自覺でも獨立でもなく、唯、單なる男子の模倣であります。女子が男子の模倣をしてゐたのでは女子は女子の本分を全く盡すことが出來なくなり、其の上に、男性文明の弊を單に增長して行く計りであります。

婦人が自我的に目覺め、思想的に理智的に人格的に自由なる人となるためには先づ第一に自分は女性であると云ふことを自覺することであります。世間には『女であり母である前に、先づ、人であると云ふ自覺を持て』と云ふ說がありまして、そして、それが優勢であるようでありますが、併し、いつから、いつ迄を人と考へ、いつから女と考へればいゝか？　それも一寸難しいし、又、人である〳〵と考へて、そして、男と同じような修養をしてゐるうちには女としての資格が失はれてしまつて女でもなし、男でもないような不具な人間になつてしまいます。

ですから、自分は女性であると云ふ自覺の上に日々の修養を積むことによつて完全な婦人になると同時に、人としての人格も備はつて來るのであります。女子の高等敎育も必要であります。始めにも申ました通り、立派な母になるためには古今東西の智

識を皆あつめても足りないのでありますが、併し、教育だけでは良妻にも賢母にもなり得ません。それは、最高學府の出身男子に良夫でないもの、賢父でないものが少なくないのと同斷であります。

最高學府を出て、社會に出ては可なり腕をふるうことができても、夫として父として男がゼロになつたのは、男子は後に必ずならねばならぬ夫である事、父であることを全く等閑に附してゐたからであります。此の際に、婦人も亦、男の不完全な所をまねて自分は人であると云ふ處に計り力を入れて、後に妻であり母であることを忘れてゐたならば子供はどうなりませうか？　次代の運命はどうなりませうか？

ですから、要は人種に對して男子よりもより重い責任が自分にかゝつてゐると云ふことの自覺を婦人が持つことによつて、婦人として人として完成すべき基礎が出來て其の上の學問なり、修養なりが其の婦人を有益な人間に致します、其處で、要は女性としての自覺にありと私は申します。人類の半數である婦人に其の覺悟が出來た時に、男性文明、不具的文明の造り直しの仕事の第一歩が始まります。婦人問題も婦人に關

係ある社會問題も政治問題も此處から出立して始めて解決の曙光を見ることが出來ますが、婦人が女性であることを忘れて單に人であるくと云つて進んで行くことは、益々諸問題を紛糾させる計りであります。

女權主義者の要求する婦人の解決、則ち、婦人の個人としての自由と云ふのは先人の造つた習慣と云ふ道から婦人を解放して、そして、何等の拘束なき原野を歩ませようとするのであります。けれども、道幅は狹くとも法律や道德の生垣で圍はれてある道の方が、原野をさまようてゐるよりも却つて自由があるのではないでせうか？　法律があつて始めて秩序があり、秩序があつて始めて自由があると云ふことを忘れて、秩序のない原野を目的もなしに跳ね廻ることを今日の解放論者は自由であると思つてゐます。

新文明を生むのは平和が必要であります。そして、其の平和は利他主義に待たねばなりません。そして、其の利他主義は母性から生れます。子供のために自分を忘れる母の愛から利他主義は生れて來てゐます。

今の世の中は有識無識に皆利己主義のために動いてゐます。つまり、自分の利益のために働いてゐます。自分の利益のためにはどんなことでもしようとするのが今の人間性です。遺傳學者の說によるとこれは遺傳だと云ふことです。で、此のまゝで進んで行くならば、いつ迄たつても世の中は此のまゝであります。けれども、此處に新しい要素を加へることによつて世の中は除々と改良されます。則ち、今迄、人に忘れられてゐた母性の價値を高調して、母性の權威を確立して、そして、母性の作用を豐富にすることであります。則ち、利他主義の精神を世の中に豐富にすることでありま す。

社會問題が紛糾して、いろ〳〵な議論が錯綜して人の心が動搖してゐる時に或る性癖をもつた人の奇矯な言葉や詭辯は、深い意義又は、秀越なる智識と間違へられます。そして、それが其の人の個性だなどゝ當人も自惚れますし、世間も尊敬致します。それがカラツポーな音計りだと云ふ處に人は氣付きません。つまり、思想を生む本當の活動的人物と他人の生んだ思想を弄ぶ言葉の製造人との區別が一般の人にはつかない

のです。個人の自由とか個性とか云ふものが重もにさう云ふ言葉の製造人に造られてゐることを私は遺憾とします。

本當に有益な思想を生む人は常に行爲から出立してゐます。そして、其の行爲はつまる處二つになつてしまいます。則ち、人を造ること丶、ものを造ること丶に。社會上の問題が無數無限にあつてもせんじつめれば此の二つに歸してしまふのでありますそして、例外は例外として置いて、原則としては女は人を造り男はものを造るものであると云ふのが私の議論の出立點であります。

男が外で働いて女がうちで働くと云ふのでは、お前の議論は少しも新らしくない、と、云ふ人があります。けれども、世の中にはさう無暗みに新しいものがあるものではありません。

自然界の現象は無數無限にあります。けれども、それを支配する自然の原則は非常に單純であります。則ち、引力の大法則によつて保たれてゐるのであります。第一、太陽系がそれによつて支へられて居ります。宇宙の精力が延長し、平衡し、そして、

共同することによつて、則ち、遠心力と求心力が調和してあらゆる諸現象が生み出されました。人間に性が二つあるのも此の宇宙間の現象の特長である二重性を人間に延長したに過ぎないものであります。

ですから、男女は、遠心力と、求心力の無限に多くの無限に變化した進化的な分業と共同の複雜な結果であると考へます。もし、そうだとするならば性の原則は物質の存在する前に存在してゐたと觀測することが出來ます。つまり、人間の出來る前に既でに男性と女性の分子が創造其のものゝ中に存在してゐたと想像することが出來るのであります。そして、進化の結果、男性と女性がはつきりと別なものに造られたのであります。

異つて造られたものが異つた作用をもつのは當然なことで、世界一の新らしがりやも、引力の法則を舊いと云つてけなすことは出來ないように、男女の分業も舊いと云つて嗤ふことは出來ない筈であります。

男女の差別を撤排しようとする所謂新思想家、則ち、女權主義者は何億萬年の進化

の法則を覆へし得るものと思つてゐるのでありませうか。

男女の分業は決して動かすことは出來ません。女が子供を生むのである以上は。唯一つ動かし得るのは其の分業に對する價値の觀念です。

ツイ、此の頃迄、勞働は商品として見られ、商品として取扱はれてゐました。けれども、多くの學者はもう長い以前から、人間に喰付いてゐる勞働力を商品と見ることの不正不道德を摘發して居ました。けれども、それが容易に一般人の耳には屆かずにゐましたが、國際聯盟の規約のうちの『勞働は商品に非らず』と云ふ一項が功を奏しまして、此の頃では心あるものは勞働を商品と見ることを恥とするようになりました。これは人類進步の過程に於て、一大階段でありました。

そして、もう一階段どうしても私共が登らなければならないのは、『ものを造ることは人を造ることとの手段である。則ち、經濟的の男子の仕事は、育兒の業則ち婦人の仕事に從屬すべきもの、もう一度云ひ直せば、人生に於ては家庭婦人の仕事が主であらゆる一切の他の仕事は唯單に家庭婦人の輔佐である。』と云ふことを一般人が認めることであります。もう一度云ひ直せば、一家のうちで、經濟的の仕事をしてゐる男子が主人でなく、育兒の業を營んでゐる婦人が主人なのであります。

天才、遺傳、環境の考察

サー・フランシス・ゴールトンの『天才と遺傳』は一八六九年に出版されたにも拘らず、今猶卓越せる價値を存して居る。其の理由は、天才と遺傳に關する、其れが感嘆すべき大努力であり、又、天才は遺傳すると云ふ證據を科學的に證明した處にある。

この書は章を分つ二十三、七百五十頁に渡る大册である。始めに、世評を標準として分けた人間の種類と、天賦の才能を標準として分けた人間の種類とを論じ、其の二種の比較を論じ、そして、其の證據としては、英國の法官、貴族、軍人、著述家、科學者、詩人、音樂家、宗教家、漕手、力士等の統計を擧げて、そして、氏自身の說を立證して居る。そして、其の結果、天才は遺傳であり、而して現實(actual)である。天才に可能性(potential)はないと云つてゐる。則ち、天才なるものは、幼年時代に如何なる

不運に逢ふとも、齢を重ぬる事五十に至る時は其の大多數は、思ひ〳〵の方面に於て成功する。換言すれば、天才は境遇の壓迫のために其の天才を現はさずに終つたと云ふ事はない。天才をもつて居る人が、もし其の嬰兒の時に他人の兒と取り換へられて逆境に育てられても、其の人は後には必ず卓越なる人物となる、と論斷し、そして彼は貧賤の中から身を起し有名な人物となつた人の例を澤山擧げて居る。

けれども、グレイは

『貧の寒さは貴き彼等の熱望を抑へ、
そして温爽な魂の流れを凍らせる。』

と歌つた。又、ウォードは云ふ。

『私が熱心に植物を研究して居る時分であつた。人里はなれた野原をそゞろ歩きして居た時、妙な草が私の目に止まつた。私は其の地方の草類に就ては可なりよく通じて居るつもりで居た故、其の見なれない草に奇異の目を見張つた。取り敢へずその草を持ち歸つて分析して見た。すると、それは、麵麭の材料になる貴き小麥であつた。け

れども穂波打つやうに豊かに繁る小麥計り見て居つた私は其れが同種類の小麥であるとは信じられない再び分析して見た。矢張り小麥である。未だ信じられないで三度分析して見た。が、どうしても其れは小麥であつた。唯、周圍の雜草に壓迫されて其の天分をのばす事が出來なかつたのである。けれども、これに人智を加へ、競爭者を取り去り敵を除き充分發達するに都合よき狀態を造るならば、これも亦立派な麵麭の材料を生み出す事が出來たのである。』

と。で、このグレーの歌、ウォードの說は天性のみでは人は到底、成功する事は出來ない。養育の仕方で初めて其の天性を現し得るものだと云ふのである。

これに對し、植物、則ち、精神のないものはそうであらうが、精神のある人間を同じやうに論ずる事は出來ないと云ふ人があるかも知れない。

けれども、人間には殊に養育が必要である。そして、それを證明するには、ゴールトンの天才に對する統計の不完全なる點を摘發すれば、足りる。

天才が遺傳であると云ふ事に異論をとなへる者はあるまい。が、天才は皆現實であ

ると云ふ事に關しては大分異論がある。のみならず、ゴールトンは可能的天才の存在を非定はして居るが、其の無いと云ふ事の證明はして居ない。或は、むしろ、氏は可能的天才の研究を全く無視して居た。則ち氏の統計のとり方は現に名を成した人物をのみ擧げて、可能的天才が機を得ずして、うづもれたのは見て居ない。水難を救ふ神の社に、水難を免れた人々が其の禮として奉納した繪馬は澤山あるが、併し水難を免れなかつた人々の繪馬はない。水難に逢つたものは奉納しないからある道理はない。世に顯れた天才以外に可能的天才を認めないと云ふ事は繪馬を奉納した人々のみを見て、其他の人々を無視したと同じ事である。

　ゴールトンの計算によると天才は十萬人に對する一人と三分の二になつて居るが、ゴールトンの外に天才の研究者はフランスにオーダン氏がある。紙面に限りがあるから、此處には委しく云はないけれども、オーダン氏の方が統計のとり方が確である。其の理由はゴールトンは重に高官の公人計りを例にとつて居る。則ち、高位高官をば優秀な才能ととり違へて居る。いはば、貨幣と同じやうに、ゴールトンは内容の如何

を問はず額面によつて天才を區別して居た。天才と云ふ事が人の位置について居て、人自身について居たのではない。たとへばゴールトンは高等法院の判事を例にとつて居る。けれども、其の高等法院へ行き辯論する辯護士のうちには、確に其の判事と同等或は以上の人物があつた事は想像するに難くない。時とすると或る政治家の如きは一國の救主とか、憲政の神などと云はれるやうなのがある。絕對に其の人はなくてならぬ人のやうに考へられて居る。處がそう云はれる人は其の位置が然らしむるのであつて、實際は平凡な人間であると云ふ事實は幾らもある。其の反對に位置が低いから出來まいと思つても、いざ、やらねばならぬ場合が來た時に、立派にやりとげたと云ふ例も澤山ある。故に公の位置を目標として天才をあつめる事は本當のものではない。要するにゴールトンの統計のとり方には非常に曖昧な點がある。科學的でなく、斷片的である。斷片的であるから不滿足である。從つて、何にもを絕對に證明しない。

これに反して、オーダンの統計のとり方は最も科學的で、正確で、結果の如何に拘らず事實を基礎として論斷して居る。オーダンは、あゝ云ふ事を證明しやう、こう云

ふ事を證明しやうとして證據をあつめたのではなく、結局正確な統計を作ろうとしたのが目的である。オーダンの統計は非常に大部なもので、今、こゝに、詳論は出來ないが、彼はフランス九十八縣の天才を研究した。一縣のうちで、多きは、十萬に對する百九十六人の天才を始めとして少なきは、十萬に對する一人と云ふ結果を出して居る。先つオーダンの研究を基礎として、天才產出の研究をしたウォードの說によると何故に同じ十萬に對する、一方では百九十六人他方ではたつた一人と云ふ差があるかと云ふに、組織よき普通敎育が社會全般に最も要用なる智識を最大限度に與へるものであるから、この敎育が普及される處には天才が出るし、普及されない地方には出ないのである。又、この敎育には經濟上の背景がなくてはならない。要するに天才の現れると現れざるとは機會があるとないとによるとウォードは云ふのである。機會とは則ち七ッの環境を意味する。物理的環境、人種的環境、宗敎的環境、地方的環境、經濟的環境、社會的環境、敎育的環境。

この中でも一番重きをなすものは經濟的環境である。そこで今の處では十萬に對し

て二人位の天才しか出してゐないのを、之をセーヌ洲の十萬に對して約二百人の天才生產數に致らしむるにはセーヌ洲と同じ環境を他の州にも造り出す事である。天才の正確なる數は我々は到底知る事は出來ないが、セーヌ州の約二百人の天才はオーダン氏の研究によれば其の環境の結果であると云ふ以上、セーヌ州に及ばざる他の州にては不足だけの可能的天才の存在を我々は認めないわけにはいかないのである。

猶、一言、云はねばならぬことは天才を論ずる人は、殆んど皆一ッの重大要素を閑却して居る。則ち、人類の半分を占めて居る婦人の問題を閑却してゐた。ゴールトンの觀察點は男子中心說より來たものであつて、婦人を全く計算の中に入れて居ない。オーダンは婦人の文學的生產力の少ないのは、機會を得ない故である、機會を與へたならば相應の成績をあげたらうと云ふ。地理的環境より見るにオーダンの所說は明らかに事實を證明して居る。人物產出の點に於ては、パリーがフランスの他の都會より遙かに優つて居る事は男子の天才に關する統計で充分に證明さたた。そこでパリーはフランスの文豪全數の百分の二十三、五分を出して居る。婦人文學者に至つては、更

に多く、則ち、百分の四十二强を出して居る。それは、婦人はパリーに於てのみ適宜の環境をもつ事が出來た故である。パリーに於ける優れた婦人にとつての好個の環境は城內生活である。フランスの城內生活はフランスの男子の文學者を產出する事、百分の二以下だけれども、婦人の秀才を出す事は百分の五以上に達して居る。

男子及び婦人が共に抱いて居る男子中心的世界觀の流行は、女性の生產的火力に對する、水に浸した毛布のやうなものである。一度このぬれた毛布をとり去つて、婦人の社會に對する眞の關係が一般に認められるならば、其の關係は必ず一變する。我々は婦人の才能や天才の分量に就てははツきりと知る事は出來ないが、併し、今日に於ても男子に比して多くは遜色ないと思ふ。男女の才能は其の質に於ての相違に過ぎない。果して、そうならば、婦人を發達せしむるの利益は單に社會活動家が增加する計りではない。何となれば、婦人は婦人の天性に從ひ男子の未だ着手せざる方面に新しい分野を開拓する事が出來るからである。かくして世界の進步は婦人によつて、其の深さ廣さを增す事はうたがいない。今日迄社會資源の計算は唯男子に付てのみ行つた

ものである。則ち、天才産出は五百人に一人であつたが、もし婦人の位置を充分に認めたならば、この數は三百人に就いて一人のわりに增加し、結局文明に貢獻の數を殆んど二倍にする事が出來る。

けれども、前述の現實的天才及び可能的天才の計算は必ず正確とは云へない。何故なら、天才は凡ての自然的產物の如く全く關係的のものである。又、何事にも階段がある如く、天才にも階段がある。蓋し、前に說明した七ッの環境は、天才產出に機會を與へると同時に天才を抑壓する力もある事は忘れてはならない。この點に付いて、オーダン氏も特に注意をして居る。

天才は遺傳である事を私は認めるが、併し、凡ての天才が現實であると云ふ事の全眞理でない事を此處に不完全ながらも注意する事が出來れば滿足である。

（ウオードに據る）

婦人の權利

スペンサー

ハバート・スペンサー小傳

英國で有名な、否、世界に於て有名なハバート・スペンサーは一八二〇年四月廿七日ダービーで生れた。彼の父の職業は敎師であつた。しかも彼の時代に一歩進んだ意見を有つて居た。彼は單なる思想に依て敎育する事の代りに觀察と考察とに依て學生を訓練する事が最善と信じて居た。ハバート・スペンサーは小供時代には體質が弱くあつた爲め大部分は屋外で運動し敎育は家庭に於て受けたのであつた。やゝ長じて英國敎會の傳導師であつた叔父に彼の敎育は託された。彼は幼年の時自然を研究する事を好んだ。幼年時代の數年間の彼の興味は昆蟲を捕へ之保存する事や蛾や蝶を養成する事であつた。彼は尙又植物學に非常なる興味を有つて居た。斯ふ云ふ風にして彼の後生の著作の科學的性質と科學的興味に對する基礎を付けたのである。彼の兩親は元はメソジスト敎信者であつたが彼の父は後にクエーカー敎徒となつた。併し、この少年スペンサーの心は獨立であつて、早い時代からジヨン、スチユアート及び彼を取りまいて居る知力階級と接觸し又其當時の科學的の精神に接觸して居つた故彼は自然、神學の事柄に關しては極端なる自由主義に傾いて居た。其當時の時代精神の持主であつた彼の叔父は彼をキヤンブリツヂ大學に送らうとしたがスペンサーは常にそれに反對して獨學を續けて居た。彼は餘り近代語學に興味を有たず又古典學にも餘り進歩しては居なかつたのである。併し數學と機械學に於ては建設的獨創を示して居た。彼の父は彼を敎師にしようとして居た。併し或る偶然なる出來事が彼の趣味に一層適したる職業を彼に與へた。それは一八三七年の秋ロンドシ及びバーミ

ンガム鐵道會社の技師長の許に彼が奉職する事になつたのである。彼はこの技師長と一年間を過した。以來彼は凡そ十年の間土木事業に關係して居た。鐵道熱が漸くさめた時は彼は既に二十六歳となつて居た。スペンサーは多くの他の青年と同様に職業を失つた、併し他の職業を求めて居る間に彼は家にあつて勤學して居た。この間彼は色々の方面の知識を蓄積する事を得た。彼はライエルの地質學を研究した。其の著書の中にラマルクの進化の原則が攻擊されて居た。併し彼はラマルクの學說から非常なる印象を得た。

尙彼が鐵道に働いて居る間未だ單なる青年である間彼は「政府の固有の範圍」と言ふ論文を書いた。斯くして彼は既に彼の後に至つての凡ての思想を規定した無干涉論の原則を設定した。後彼はロンドンに行つた、そして『イコノミスト』と云ふ經濟雜誌に從事して一八四八年にその編輯補佐となつて其職を一八五二年迄續けた。この間彼はジョン、ヘンリー、ルイス、ジョン、エリオット及びジョン、スチュアート、ミルを知人とする事が出來た。それより一八五一年に『ソーシャル、スタチイツク』と云ふ本を書いた。この書は反對のインフリユエンスに調和して人の氣付かざりし密着なる關係を發見した結果であつた。

彼は斯くしてイコノミスト社を去つた後、八年間熱心に研究した結果一八五五年心理學を出版した。かくして彼の綜合哲學の大著書に彼は取りかゝつたのである。この著書は何人も知るやうに哲學の第一の原理、生物學の原理、心理學の原理、社會學の原理及び倫理學の原理、合せて十册、この外、科學的、政治的及び哲學的の論集が數册ある。彼は一九〇三年十二月八日に死亡したのであるが、彼は死する前に自傳を書いた。

私はこゝにスペンサーの哲學を一々批評する暇も有たず且又私のよくする處のものでないが、併し乍ら社會學者としてのスペンサーに付て一言云つて見たい。スペンサーは綜合哲學を書かうと決心した時に彼は彼の論ずる問題に一大缺點を發見した。それは外ではないが他の學問の材料は豊富でも社會生活の事實と云ふ最も大事な事實が未だ科學的の解剖の洗禮を受けて居ない事を發見した。この不足が補はれざる以上完全なる綜合哲學は到底不可能な事であると彼は考へた。斯くして彼は綜合哲學を完成する前に毅然として社會的事

質を集めそれを解剖し説明しそれを歸納する事に依て社會學を完成したのである。彼の生物學的社會學が如何に非難があるにしても社會學界に於て一大紀元を造つた事は餘りに明かである。一切の彼の著書が無價値であると假定しても、凡ての缺點を差引いても、尙彼の社會學は彼をして社會學者として又哲學者として第一位に置いて居る。社會學者ウォード博士はスペンサーに付いて次のやうに云つて居る。

「厳密に云ふならば今迄に説明された宇宙の原則は三ツよりない、そして只その中の一ツのみが一般に承諾されて居る。その三ツとは第一が引力の法則、第二が星霧説　第三が發達論でスペンサーは二と三を一ツに調合し結合して一ツの進化論を造らうとして居る。彼の企ては先人が且て企てたか或ひは完成したものよりも遙かに進んだものである。實にスペンサーが用ゐた進化と云ふ言葉の中に含まれたる思想は絶對宇宙法の概念に最も近く接近したものである。」と

で私はここに二十世紀の殊に社會主義の思想の盛んなる今日最も興味を感ずるのはスペンサーとマルクスとを比較したい事である。何となればスペンサーは殆ど極端なる個人主義者であつた、マルクスが殆ど極端なる社會主義者である如くに。

一體社會主義對個人主義を抽象的に論じても得るところは殆んどない、何となれば實際に於ては絶對の個人主義又は絶對の社會主義と云ふものは存在すべき筈がない。社會主義的及び個人主義的の極端論の中の唯一の答ふべからざる議論は相互の位置の不合理を示す議論である。私有財産の權利の發達が起る迄は、即ち野蠻的社會主義者の時代が經過する迄は文明は不可能であつた。けれども文明の一歩々々は個人主義に制限を加へる事であつた事も又等しく眞理である。

スペンサーが個人主義の首領として立つ如くマルクスは社會主義の首領として立つて居る。けれどもそれは單なる抽象的の見方である。實際に於ては絶對の個人主義の信仰の論駁の必要よりも絶對社會主義の信仰の論駁の必要がより多い。何となれば今日に於ては有害並びに無害の空想家の大部分は個人主義を信ずるよりも社會主義を信ずるから。たとへば科學者であつて、一流の社會主義論客であるピーヤソン博士、又彼と同型の佛蘭西の社會主義者ドビユは云ふ。未來の兩

性の關係は小供を生むための結婚ではない、併し女と男の間の關係は只友人關係である。小供は兩性關係に附物ではない。兩性の關係は小供の出來る迄は法律の干渉をうくべきものでない。併し、小供が生れた時は國家が干渉する權利を有つて居る。女が子供の父に經濟上依賴さする事から女を救ふ爲に小供は國家の入費で育てべきであると主張して居る。併し實際に於てさう云ふ事が實行できるものでない。私は、『社會主義』即ち『親なき小供の國』と云ふ書物を讀んだ。この書は米國の勞働同盟會に捧げた書物である。社會主義の議論を抽象的に進めて行けば皆この書物にあるやうな議論になる。で、これを實行可能な議論に落ち付かせるためにはスペンサーの個人主義の研究の如きは最も時宜に適したものであらうと思ふ。

　スペンサーの百年紀が今日の社會には特別の意味をもたらしたものである。で私はこの機を利用してスペンサーの百年紀を紀念すると共に一般思想界にスペンサーの所究を奬勵するものである。私はこゝにスペンサーの婦人觀を考へて見る意味に於て氏の『婦人の權利』を抄譯する。

男子と平等な權利を女子に拒む人は、女子の智力が男子に劣つてゐると云ふことを理由とする。けれども、其の理由はあらゆる方面から破すことが出來る。

第一、もし、權利が、智力の多寡に比例して與へられるものならば、そんならば、それと同じ標準が男と男の間の權利の割振りにも應用されなければならない。そして、其の結果は非常に複雑になるであらう。

第二、もし、そうすると、此處其處に普通の男子よりもより大なる智力を持つた婦人があるから、或る婦人は或る男子よりも大きな權利を持たなければならないと云ふことになる。

第三、凡ての男子に或る一定の權利を與へ、凡ての女子に外の分量の權利を與へ

る代りに、前述のように權利を割振るならば、男女の別には全く無關係に權利の階級を無數に造らねばならぬことになる。そして、全然得るに不可能なものが必要になつて來る。則ち、人の智力を計るハカリと權利を計るハカリが必要になつて來る。

であるから、智力を標準に權利を與へると云ふ理由は、唯、單に此の問題を解割したゝけで、もう、破れてゐる。

一體、權利とは何を意味するか? 權利とは人の持つてゐる能力を働かせる自由に過ぎないであらう。そして、女子が智力的に男子よりは劣つてゐると云ふことは、女子の能力は男子の能力よりも力が弱いと云ふことに過ぎないであらう。

そんならば、女子の能力は男子の能力に劣つて居る故に女子の權利は男子の權利よりも狹いのだと云ふ主義はどうなるかと云ふと、女子は男子よりも能力が劣つてゐる故に、女子は彼女の現に持つてゐる能力を、男子が男子の能力を働かしてゐるように、働かしてはならないと云ふことになる。

男子の望む處のものは結局男子の信仰となる。男子の征服慾は人を殺すことを德として祭り上げてしまつた。多くの人種の復讐慾は暗殺を義務と心得るようになつた。スパルタ人は巧みな盜みを賞揚した。盜みを巧みにするようにならなければ一人前ではなかつたのだ。又、財をあつめる人のうちには、其のために費す時間の長短によつて尊敬もされゝば卑下もされる。金をためるの熱心さは神樣の

ように崇拜されるのだ。吝嗇家のうちにも一種の道德があつて其の吝嗇を辯護する。こう云ふ風に人の信仰を支配する人の感情が、又、男子と女子の關係に對する男子の考へを決定する。そして、社會狀態の野蠻さの度に比例して、男の考へが苛酷である。何處を見ても、強いものゝ法律が男と男の間の關係を規定する以上は、その強いものゝ法律が、又、男子と女子の間の關係をも規定してゐる。

國家に於ける壓制主義は家庭に於ける壓制主義と密接な關係がある。土耳古、埃及、印度、支那、露西亞及び其の他の封建的な國家は、其の名を擧げたゞけでも以上述べた處の實例になる。

一人の人が他の人を自分の思ふまゝに扱ふと云ふことは亂暴で、殘酷であると云ふことは、今、速かに認められつゝある。精選された感情を持つ人は自分の同胞を壓制することを好まない。同時に、人から頭をペコ〳〵下げられることも好まない。憐れな無智な同胞を押しつけて自分が高くとまつてゐることを好まないから、そう云ふ人は少なくとも自分の前にゐる其等の無智な人間を自分と同じようなものにしようと勸める。そして、奴隷的にならないように、自尊心を持つように其等の人を奬勵する。そう云ふ人は他人の尊大な、暴慢な態度を好まないから、自分も目下(めした)のものに對して命令的な語調を避ける。たとへば、下僕に對して權力をもつて、命令をする代りに要求をする。彼は主人と云ふ格を無くしようとする。其のために下僕に對しても、『どう

ぞ』又は『ありがたう』と云ふ言葉を用ゆる。

現代の紳士は他人の威嚴を益々尊重しようとする傾向をもつてゐる。其の結果、人に恩惠を與へようと思つても、其れが其の人の威嚴を傷けはしないかと云ふことを恐れてゐる。他人を支配することになる態度や行爲は精選された感情を破壞することになるので、そう云ふ人には絶へられないのである。

此の精選された感情がます／＼增加することは、夫婦關係を主從關係と見ることの不正並びに、夫婦の間に存在すべき正當な關係が明らかになつて來るであろう。下僕に對して命令的な態度を好まない人、目下に對して目上の態度を好まない人は、終生を共にする配偶者の權利と威嚴に對しては最大なる同情を持つ筈、則ち、妻に對して主宰者の態度をとることは出來ない筈である。

命令は愛情を凋萎する。兩性を結びつける愛情のうちに如何なる美があらうと如何なる詩的な要素があらうとも、尊大な夫の態度と云ふ冷やかな空氣のうちには其の美も其の詩的な要素も萎びてしまう。人間の性質中には愛と壓制とが存在してゐるとは云つても、併し、此の兩者は一所には榮へないものである。愛は同情的であり、温和であるが壓制は無情で冷酷である。愛は自己犧牲であり、壓制は利己主義である。であるから、此の二者は共存出來ない。相手を引きつけると云ふことが愛の性質である。そして、反撥するのが壓制の性質である。愛と壓制

はかくの如く衝突しながら絶へず相手を破壞しようとする傾向をもつてゐる。愛と壓制とが共存出來ると考へる人は、妻を壓制する人に付て考へて見るがよい。絶へず妻を壓制してゐる其の夫婦關係は害されずに居ると考へられるか？　必ず妻の感情は害される。

權利と其の權力に屬する壓制が人間を制裁する唯一の力であると考へる人は澤山ある。そう云ふ目前のものゝ外は何にも見ない人は、平和と秩序は腕力が無くても維持出來ると云ふことを認めない。そう云ふ人は、男子が女子を支配することは間違つてゐると云ふ學説に反對する。そして、其の反對の理由は夫婦關係は主從關係があつて始めて存在すると云ふのである。そして、男女間の權利の平等の實行不可能を擧げて、男女平等論は嘘だと云ふのである。もし、男女を平等の位置に置くならば夫婦は永久に衝突するであらう、お互ひの欲望が常に衝突してゐるならば結婚關係は危ふされる。であるから、男女平等の結婚法は有害であると云ふのである。

けれども、これは餘まりに浮薄な結論である。成程、完全な法律と不完全な狀態の間には常に矛盾がある。社會の狀態が惡るければ惡い程、本當の道德法はますく空想に思へる。如何なる道德法の原則も直ちに充分に實行できないと云ふ事實が其れを證明してゐる。實に其の規則を完全に實行するためには人間性の改善が前もつて必要であるから。道德の原則と、現實の人間との間に矛盾があるこ

とが、其の原則の正しいと云ふことの證據にはならないとしても、併し、其の原則をよしとしなければならないことは事實である。で、男女平等の自由の法律の下には夫婦が調和して生活出來ないと云ふ議論は其の不完全な狀態を基礎にして出て來てゐるのである。と云つて、それが法律の正確さと神聖さを決して破壞するものではない。

併し、今や、順應の過程は其の調和に對する此の障碍を除々にとり去りつゝある。道德法と、そして、其の法を行はうとする衝動を認むれば、結婚法に於ける男女の權利の平等は其の正しさを人々が悟るや否や可能になつて來る。

男子の權利を維持するために我々を導いた其の感情が、我々の隣人の權利を尊重するようになつたと云ふことは前に述べた。各人が生れながらに持つてゐる要求に對して熱心であるの狀態は必ずしも爭ひの狀態ではない。何となれば正當な同情がある限りは他人の權利を犯すと云ふ傾向は必ず減じて行くから。これは既でに經驗の證明する處である。何となれば封建時代に存在してゐたよりも個人の自由の範圍は大きくなつてゐること、他人の權利を侵害する氣分が少なくなつてゐることは抗むことの出來ない事實である。そして、此の二ッの變化は並んで來てゐる。相互的なものである。で、此の狀態はます〳〵續かなければならない。

そして、社會が兩性間の權利の平等を認める程に充分進んだ時、そして、女子が自分等に對する正當な權利を明瞭に見

るようになつた時、そして、男子が自分等の要求する自由を婦人にも與へようと云ふ貴い感情を持つようになつた時に、人間は一切の權利の平等を實行出來る迄に進んだのである。

さうなつた時に結婚生活は終生の爭ひではない。お互ひの讓歩が特長となる。妻の要求を無視して夫の要求を最高に置くことの代りに、又は、妻がそれと同じことをすることの代りに、夫婦お互ひがお互ひの權利を侵害しないようにすることが進んだ人々の慾望する處である。

夫婦がお互ひに防禦し合ふ必要がなくなつて、お互ひの權利を保護し合ふようになつて、お互ひの權利を侵害することが最も恐しいことであると思ふようにならなければならぬのである。

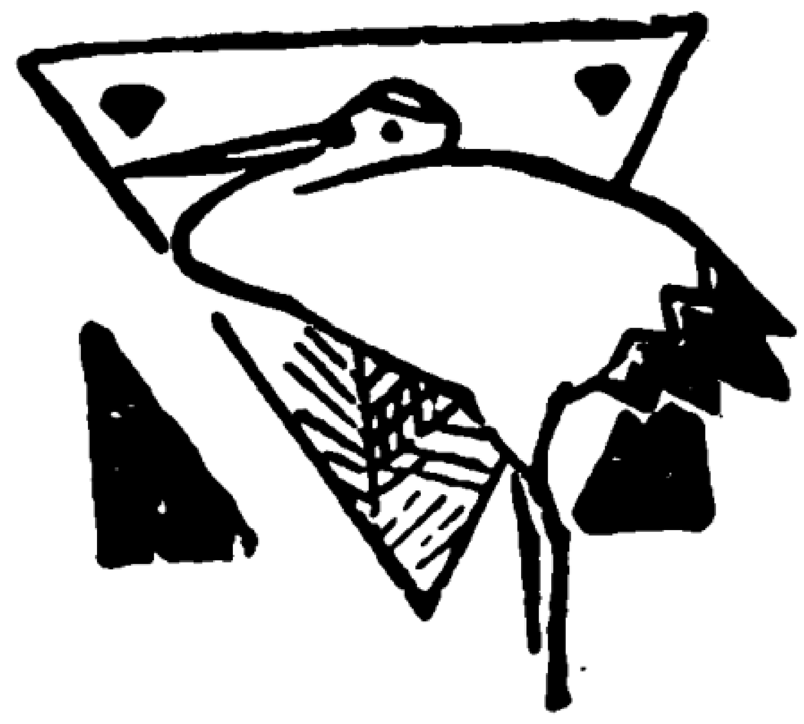
ジョン・スチユアト・ミルの「婦人の服從」の梗概は全部で三章あります。十一月號に第一章を、十二月號に第二章を載せまして、亦三章を此の號に載せますと其れで全部ですからそうしたかつたのでありますが、大正十年はスペンサーの百年祭に相當しますので、不圖スペンサーと婦人と云ふようなことを考へてスペンサーのものを入れました處が紙數がなくなつてしまいました「婦人の服從」の梗概は二月號で完了とすることに致します。

謹賀新年

大正十年一月元旦

山田嘉吉

山田わか



海外事情

婦人平和同盟會

世界の最大なる禍患を撲滅し、世界人類の生活の安定を計るために成立した國際聯盟の完成を期するために、米國紐育に『婦人平和同盟會』なるものが設立された。そして此の會は、一九二一年（大正十年）の國際聯盟會議に提出すべき要求のプログラムを既でに作製した。同會が次の會議に一生懸命力を入れてゐる理由は此の會議に於ては、世界調和の根本となるものは何にかと云ふことが主題となることを豫想して居るからである。そして、其の要求は、國際聯盟の基礎となるべき。

海洋の自由――自由市場――萬國の武裝解除。民族自決權を確立すること。國際聯盟を支配し得る團體としての國際議院の發達を計ること。民主的國民外交としての公開外交。國際平和會議に出席する代表者は國民が直接に選むこと。軍備縮小の主張者として世界に知られてゐる米國は萬國徵兵令の適用を抗むこと。

等であるが、實に、今、米國の一部分の婦人は國際原則を根本的に研究してゐる。そして、戰爭と云ふ有害な樹の芽を根こそぎむしり取つてしまはうとしてゐる。そして其の有害な樹の芽は外國に投資することや、幼稚な國民を利用するこ

とや、商業の行く處には主權も行くと云ふやうなことなどだと言つてゐる。又、一個人の企業を保護するために全國民が戰爭と云ふ渦の中に投げ込まれるような馬鹿氣た事を除却しなければならないと云つてゐる。

國際聯盟會議に提出すべく、『婦人平和同盟會』が作製した要求のプログラムのうちに海洋の自由――自由市場と云ふことがあるのは、それに付いて米國が殊に苦い經驗をなめたことがある結果である。

米國はもと十三州で成つてゐて、其の各州が皆獨立してゐて、各州が皆自州に都合のよいような法律を造つて通商をする權能をもつてゐた。處で、その通商權が十三州の同盟を殆んど破壞してしまつた。米國が英國から獨立するための戰爭に於てはよく一致團結して戰つたのであるけれども、其の戰ひが終ると同時に、各州の利益の衝突が各州を不和にしてしまつた。其の結果、バジニア州の或る政治家の如きは米國の商船會社を捨て置いて昨日迄敵であつた英國の商船會社を援助した方が米國全體のために利益であろうなどと考へた程であつた。又、コネテカット州は昨日迄敵であつた英國の商品の上によりも自國のうちのマサチユセツ州からの商品の上により高い税金をかけるようなことをした。

紐育州も隣州に對して關税と云ふ障壁を造つてしまつた。其の當時の紐育市の食料はニユージエシーの農夫からの供給を受けてゐたのであつた。野菜類やバタ

やチーズを積んだ船がハドソン河を下つて來たのであつた。處が、紐育州會はニユージエシーから來る十二噸以上の船は外國船と同じように税關を經なければならぬと云ふ法律を發布した。そして其の法律はニユジエシー州から來る船に計りでなく、コネテカット州から燃料及び食料を積んで來る船にも適用された。

ニユージエシー州は勿論コネテカット州も非常に立腹して、そして、コネテカット州も亦、同じような法律を發布したそして、三州が睨み合ひをするようになつた。曾て、ジョージ・ワシングトンは『各州には烈しい可燃性があつて、それが一寸した火の子でゝも燃へ上がろうとしてゐる。』と云つたことがあるそうだが、各州のさう云ふ態度を見て云つたものであらう。

此處で一番苦しいのは港を持たないニユージエシー州で、此の州では他州から物品を取りよせる度毎に莫大な税金を紐育州に拂はなければない。で、もう一方の州フイラデルフイアを通じて他州との交通をしようと思へば、フイラデルフイアでも亦紐育州と同じ法律を造つた。であるから、丁度『ニユージエシーは兩端に呑口を附けられた酒樽のようなもの。』で紐育とフイラデルフイアに吸ひとられてしまうと云ふ狀態に陷つた。

遂ひに、ニユージエシーの人々は激昂した。そして、米國中央國會へ請願した。で、もし、中央國會が紐育州に制限を加へないならばニユージエシー州は中央政府の負擔を一錢たりとももたないと云ひ

出した。此の請願は先づニユージエシー州獨立の布告である。其處で、中央國會は大いに狼狽して、直ちにニユージエシー州に委員を送つた。それから、州と州との間の通商規定及び其の他の重用な事柄に於て統一的な組織を造り、共通な利益と永久な調和とを考察するようになつた。

こう云ふ經驗から米國婦人は、世界の平和を永久的にするためには國際聯盟が各國に通商の機會を平等に與へ得る權能を持たなければならぬと云ふのである。そして、世界の市場も、河も、港も、鐵道も、運河も、海上も、各國が自由に使用し得るものでなければならぬと云ふのである。

米國の人口と世界平和

比較統計の表は、普通一般の人には何等の興味がない。數字を人は讀むには讀むのであるがいつも唯素通りである。けれども、ものを深く考へる習慣を持つ人は其の數字からいろ／＼な事業をたぐり出す。そして、個人のこと、及び、國民の事に付いての政策を立てる。であるから、統計は凡ての新聞雜誌の論説よりも學者の講演よりも重用なものである。則ち、國民が正しい方向に進歩しつゝあるか、それとも、退歩しつゝあるかと云ふことは如何なる名論卓説よりも統計が最も雄辯に語るものなのである。

合衆國は一九〇〇年以來三千萬の人口が殖へてゐる。そして、此の人口の増化が國民を統一した。たとへば、南北戰爭に於て北方が勝利を占めたのに付いてはい

ろ〳〵原因はあろうが、要は北方に人口が多かつたからである。そして、それが先づ南北を統一したことになる。南北戰爭、則ち、南北統一の後に米國民は非常な勢ひをもつて西部に擴つて行つた。

　其の結果は鐵道の延長となり、國民の發達となり、國民の健全な發達は國際間に勢力を得ることになつた。例を擧げればキューバのために干渉して西米戰爭となり、其の結果は西インディスのために新紀元をひらいた。又、ハワイを合併することによつて太平洋上に勢力を得、フイリピンを管理するようになつた。日露戰爭を仲裁し、一方に於ては支那に償金を免除し、アラスカの國境を確にして北方に於ける領土を發達させ、最後に國民的企業としてパナマ溝渠を完成した。これ皆西半球の保證された平和と發達を保護するためである。米國がキューバを解放し、キャリビアン地方に平和を設定したのは海軍の力である。米國の大西洋から大太洋に渡つての發達は一言で云へば人口が殖へたおかげである。でこれから先きの米國の使命は人口の增加と富の增加とをもつて世界の平和を保證することである。

　以上は米國の評論雜誌の社說であるが米國の富と人口の增加が果して世界の平和を保證する手段になるかどうか。第二の獨逸となりはしないか、どうか、私達は薄氣味悪いような氣持がする。獨逸が過去二十五年間に人口が三倍になつたと云ふことが、獨逸の革命の最大原因であつたと云ふ事を私達は忘れてはならない。

再婚に附て

「貞女兩夫に見えず」と云ふ言葉は本當に古い言葉です。個人の自由、戀愛の自由が高調せられてゐる今日これを婦人に强ゆる人があるとすれば、其の人は世間の笑ひ草になるでせう。實際、强ゆることは愚なことです。又、强いられて全く自分の本心でもないのにそれに服する婦人があるとすれば其れは悲慘なことであり、のみならず、有害此の上もないことであります。其處からいろ／＼な所謂不正又は弊害が續出して來ますから。

けれども、もし、夫が妻に與へた感激、又は、愛情が偉大であつたゝめに、其の夫の死後も其の感激又は愛情が妻の心に生きてゐるために妻が再婚出來ないと云ふならば此の位ひ美しいことはないでせう。そして、これが全く理想的な結婚であります。

さう云ふ理想的な結婚生活をなし得た婦人が亡夫の温い愛情の記憶に生きて行かうとしてゐるのに、それに再婚をすゝめたり、又は、經濟上の理由から餘儀なく再婚せしめられるならばこれも亦悲慘の極であります

ですから、夫と死別した婦人の再婚と云ふ事は絕對に本人の氣持ちによつて定むべきもので決して他からの干渉を許すべき性質のものではないと私は信じます

貞であり、不貞であると云ふことは第一に本人の性質にもよることでありますが、併し、貞となり不貞となるに付いては相手の性質も亦重要な要素でありますどんなに妻が貞淑であり忠實であつても、其の貞淑や、忠實の價値を見ることの出來ないような夫が正しい妻を尊敬することもせず放蕩に身を持ちくづしてゐて、そして、死んだ後に妻の心に殘つてゐるものが苦しい事や不快な事計りであるのに、さう云ふ男に對して妻が一生、貞操を守る必要が何處にありますか？

ですから、『貞女兩夫に見えず』と云ふ言葉がカビの生へた古物のようになつてしまつたのは、それだけ現

代の男子が女子に貞操を守らせ得ないようになつてゐることを語るものであります。

夫として無價値な夫が死んだ其の日にでも再婚することが婦人の個人としての自由、戀愛の自由であると同時に、夫として有價値な夫の死後、其の夫のために貞操を守つて一生、再婚しないことも亦婦人の個人としての自由、戀愛の自由を貫徹したものであります。ですから、再婚した、又は、しないによつて、其の婦人の幸、不幸、又、貞、不貞を斷じて判斷できないものであると私は考へます。

ずツと以前のことではありますが、結婚後間もなく其の結婚者の片方が死んだことを聞く時に私はいつも氣の毒と云ふよりは、(氣の毒と云ふ氣持ちも勿論あるのですが)それよりも、其の夫婦の生活が無駄であつたと云ふ氣持ちの方が多う御座いました。これに反して、十年以上同棲の後にどちらかの片方が死んでも、その無駄であつたと云ふような氣持ちは致しませんでした。

どなたでも、さうであるか、それとも私計りがさうであるかは存じませんが、私は或る事に付いて先づ感じます。そして、なぜ、さう感じたかを自分で解剖して見ます。そして、此の結婚生活の期間の長短によつて別な感じを持つ、其の感じを解剖して見た結果、私は次のような理由のあることを發見しました。

結婚生活の期間が短くては夫婦お互ひの人格が双方に食ひ入る暇が無かつた。云ひかへれば、結婚生活の實が擧がらなかつた前に、もう一度云ひかへれば、夫と云ひ妻と云ふ觀念がお互ひの精神にしつかりと植へつけられる前に別れてしまはなければならなかつたので、一方の死によつて、もう一方の心はすぐ空虚になつてしまう。けれども、少なくとも十年の月日を同棲すれば曲りなりにも夫婦の實が擧がつてゐるから、よし、相手の肉體は亡びても精神的の既婚者として、淋しい悲しいと云ふ點に付いては同じでも、とにかく、人生が頼りないような、からツぽうのやうな、やるせないやうな寂莫からは逃れられる。そして、底のないやうな、ぬけた處があるような人間になる悲しい運命からは逃れられる。と、云ふやうなことを。

夫の肉體は亡びても、夫の精神が自分の心のうちに生きてゐるやうな婦人にとつては、「兩夫に見えず」と

云ふことは如何にも自然であります。兩夫に、又、兩婚に見えることのできないのが本當の結婚でありませう。『婦人畫報』所載拙稿「母性保護から見た未亡人」のうちの一部）

戀愛と性慾

世間には往々戀愛と性慾とは別だと云ふ人があります。つまり、愛しもしない相手によつて性慾の滿足を得られると云ふのであります。けれども、戀愛と性慾とを別にして考へるならば、そして、それを實行するならば、必ず、愛しもしないものを單なる性慾の道具としなければならない。道具とされる奴隸が一方になければならぬと云ふことになります。

そして、其の道具の標本的なものは娼妓でありますが、大正の聖代だとか、デモクラシーの時代だとか云つてゐる今日、人間を單なる道具として娼妓の存在が正しいことだと思つてゐる人がありますか？　私はないと思ひます。

徹底した性慾觀をもつことの出來ない人は『今日の性的道德の程度では娼妓の存在は止むを得ない』と云ふのでありますが、事實、又、さうでありますが、併し、さう云ふ人は自分の娘や妹を娼妓にして置かれるかどうかを考へて見なければならない。自分の娘や妹を娼妓にして置くことが耐へられないならば、他人の娘であり妹である女達を娼妓にして置くことの不正を悟つて娼妓の絶滅を期さなければなりません。一般の男が其の不正を悟つて娼妓に接近しなかつたならば、需用者のない處の供給者は自然に滅してしまいます。

娼妓の存在をよしとする、則ち、愛と性慾を別とすることの出來る、云ひかへれば、人間を道具として恥だと思はないような人間が社會的にもの云ふことを許されてゐる我が國の言論界の調子の低いことを私は悲しみます。

○

私いうちでは長い間貧乏生活を續けて來ましたが、借金をして腹一杯食べるよりも饑じいのを我慢しようと云ふ主義を世帶を持つて以來今日迄續けて來ました今では其の我慢をする必要はなくなりましたが、また、衣類は人並みのものを持つて居りません。又、今日の所謂人並みのものを持つ必要を認めません。自分の收入のうちから樂に出來る範圍内のものをこしらへて着て居ればよいので、どう云ふ場所へ出るにも自分のふところ標準で造つて置いた着物では不都合だと云ふならば、そう云ふ處へは行かないことにして居ます。そして、それが進歩だと私共は信じてゐます。なぜなれば其れは無駄な努力をはぶくことになり、無駄な努力をはぶくことはそれだけ進歩の餘裕ができるのですから。

○

今日一般に最も多く讀まれてゐるものは小說でありま す。そして、其の小說の多くは戀愛談であります。そして、又、其の戀愛談の多くは最も不完全な人間の弱點を叙述したものであります。殊に、讀むに耐へないのは筆者自身が充分に了解してゐない名句が並べられてあることであります。

さう云ふものが一般の青年男女に歡迎されると云ふのは一般青年男女の意志が薄弱で動搖してゐることを語るものだと思ひます。如何にも不自然に且つ不完全に他人が造り上げた運命を讀んで喜んでゐると云ふのは情けないことだと思ひます。

極く僅かな例外を除いて、多くの青年男女は常に他人から考へを貰ふ〳〵としてゐます。けれども、一體、自分のことは自分で考へなければならないものです。自分で自分のことを考へる人は自分の缺點が早く分ります。そして、ズン〳〵進歩して行きます。けれども、人に考へて貰ふ人は其の缺點が分りませんから進歩しません。

殊に、著作家と云ふものは大抵偏見をもつてゐます。ユーゴーのような天才、實に彼の小說に現れて來る人物及び事情は皆公平に描かれてありますが、それでも矢張り偏見がありました。そして、其の證據として擧げられてあるのは、ナポレオンがウエリントンに破られたことを許してユーゴーは『ナポレオンは第二流の人物に破ぶられたと云つてゐることであります。つまり、ユーゴーはウオタールーに於けるウエリングトン

の遠大にして的確な戦略を認めないで、唯一途にウェリングトンを二流の人物と定めてかゝつて、唯或る機會によつてナポレオンが破られたと云つて、そして、後世を誤まつたと云はれてゐます。

ユーゴーのような大人物ですらさうなのですから、確實な人生觀もなく、社會苦もなめず、個人として眞に月並めてもゐない一種の器用兒が書きつゝつた文學殊に、戀愛談に多くの望みを置くのは置く方が間違つてゐるかも知れませんが、併し、讀書界、殊に未來を背負つて立たなければならない青年男女が其の種の文學にあこがれてゐることを知る時には一苦言を呈さないわけには行かないのであります。

新時代を背負つて立たうとする青年男女はさう云ふものにひつかゝつてゐるのを止めて、それ等に對して嚴正批判を下すような態度にならなければなりません。(『婦人界』所載拙稿『母性と性慾』のうちから)

婦人参政権運動

『人生は苦勞なものだと思つて居れば無事である。平和な日が每日々々來るものと思つて居れば不平でたまらないが、苦勞が常だと思つて居れば何でもない。そして、たまに來る平和な日は日頃の苦勞の償與のようで、一層愉快だ。』と、私は知人から聞かされまして、私の心はピツタリ共れにはまつてしまいました。ですから、『樂あれば苦ある。』と云ふ言葉は、苦さ樂が交はる〳〵に又は哀と哀に平均してあるように思へるから嘘だと思ひました。つまり、一つの樂を得るためには十の苦を經なければならないと思ふのであります。云ひ直せば、朝から晩迄の數々の苦勞は、床に入る時の『今日も一日無駄には過さなかつた。』と思ふ一瞬間の樂な氣分で償ふことが出來るものだと思ふのでありますす。

○

英國の婦人参政権運動に於て武斷派と云はれた、パン

クハースト夫人一派の運動ぶりは世界で有名なものでありましたが彼女達は決して始めつから暴力に出ようとしたものではなく、他からは暴力を加へられても自分達は決して暴力を用ひないと云ふことを自慢に思つてゐたのだと云ふことであります。

けれども、彼女達が其の時の總理大臣サー・ヘンリー・キャンベルバンナーマン氏を訪問した時、氏は『この內閣の壽命中は自由黨政府のために、婦人參政權の議案提出を保證することは出來ない。』と云ひました。けれども、氏は婦人運動者の目的に同情してゐたので、時の要路に立つて婦人參政權に反對してゐる人々を苦しめたらよからうと云ふようなことを云つたので、彼女達は政府に對して公然宣戰を布告しようと決心したと云ふことです。

そして、其の亂暴な行爲は公會に於て大臣に質問と云ふかたちで現れました。けれども、大臣達はたまには鄭重に答へることがあつても大抵は侮蔑したり、笑ひとばしたり、時によると會場の外へひきづり出させたりするので、ツイには大臣に詰問と云ふことになり、又は、横から靑菜を投げ入れたりするようになり、果ては守衛の立腹となり、荒々しく扱はれるようになり、彼女達はあらゆる無禮を忍ばなければならなくなつたと云ふことであります。そして、彼女達から始めたのではない騷動のために彼女達は告訴され、宣告され、そして、投獄と云ふことになつたのだそうです。

其の後アスキス氏が總理大臣になつた時、氏は彼女等一派からの代理委員を受けることを抗んだので、婦人達は無理に議會へ押し入らうとするし、警官はそれを抗まうとするし、又々此處に騷動が起つて數百の婦人は投獄されました。そして、彼女達を普通の囚人として扱ふとしたので、彼女達は其れを抗み、そして、男子の政治上の犯人が受ける第一等の取扱ひを要求するために絕食同盟をして、其の結果が、あの、我が國の新聞にも寫眞が出てゐた、役人が腕力で婦人達の口へ食物を注入すると云ふ悲喜劇が演じられたのだと云ふことです。

我が國にもいよ〳〵婦人參政權運動が始まります。どうか、こう云ふようなテツを踏みたくないと思ひます。（『婦人公論』所載拙稿『婦人參政權と人生苦』のうちから）



太郎さんの菊觀

原田琴子

「タロウサン、コノ十五ヒニオヂウサンオバウサン、カナスギノオヂサン、クサカリノオヂサントデキクミニユキマスカラ、タロウサンハ十時半マデニ兩國ステーションヘキテクダサイ、タトシオテンキガワルケレバヤメマス」

かういふお葉書が田舎のお祖父さんから太郎さんへあてゝまいりました、それは丁度太郎さんの初のお誕生の日で、お父さんとお母さんと太郎さんとれーやとは朝日のさしこむお茶の間でお赤飯を祝つてゐた時でした。

「をかしいお祖父さんだこと、十五ヒただのオヂウサンオバウサンだなんて、」

と眞先きに笑ひ出しましたのはお母さんでした、サモ／＼おかしくてならないといつた風にお箸をおいてお母さんは袂を口へ當てました。

「昔の人は、假名づかひを知らないんですよ、だが十五ヒとは少し變だね、電報のやうで」

とお父さんは讀みさしてそばへおいた新聞の上へ葉書を載せて云ひました。

「太郎さんにお出でつて仰云るんだよ、太郎さん一人であんよしてゐらつしやいよ」



なほも笑ひ止まないでお母んは丁度ちやぶだいの向ふ側に立つて、しきりにお箸をふりまわしてはしやいでゐる太郎さんを眺めながら云ひました。

「お母さんやれーやは行かないでも太郎さんさへ行けばいゝんですよ、お祖母さんは。太郎さんのお顔さへ見ればれ」

「えゝ〳〵左様でございますとも、外の者は皆太郎のお供だ、いつも左様仰云るんでございますもの」

とれーやも言葉を添へました。

「それはさうと十五日にお留守居して戴けますかしら、お忙しいんぢや御座いませんか？」ふと真面目になつてお母さんはいひました。

「いや構ひません、皆でゐらつしやい、太郎ちやん、オヂウサンとオバウサンが君を見たい〳〵とさ」

軽くかう答へてお父さんは片手でお茶腕を片寄せながら片手を太郎さんの方へ延しました。タツタツタツとうれしさうに唇を鳴らして太郎さんはちやぶだいにつかまりながら、お父さんの方へと歩きよりました。

「こゝまでゐらつしやればいゝんだのに——」とふとお母さんはつぶやいて、何かを考へゐやう



な眼付をいたしました。お母さんの心の中にはある事が思ひ出されました。

一年近くの間訪れて得られなかつた貸家が、やう／＼みつかつたといふ報せが東京のお父さんから來ました時、お祖母さんは決して喜びませんでした。（つひ十日ばかり前までは太郎さんもお母さんもねーやも田舍のお祖父さんお祖母さんの家にゐたのでした）ことにその家が東京もずつとはづれの目白の方だと聞きました時、お祖母さんはがつかりしたやうな腹立しいやうな不機嫌な顔をいたしました。

「兩國から電車で一時間もかゝつて、まだそれから餘程あるなんて、ぢやあお祖母さんにはとても行けやしない。これからはもう何も送る事も出來やしない。そんなに遠くちや運賃がかゝるものかうお祖母さんは云ひました。そのお祖母さんのお心持はお母さんもよく分りました。ならうことならお祖母さんは太郎さんや太郎さんのお母さんをお家へ引とめて、自分の傍へ置きたくてならないのでありました。それといふのがもと／＼お母さんはお祖母さんの一人の子で外にたのしみにする子を持たないのでありましたから。そしてお祖母さんはたつた一人東京でさみしく不自由がちに暮してゐるお父さんの事なぞはともすれば忘れてしまふのでした。それどころかどうかするとお祖母さんはお父さんといふ人は、お母さんや太郎さんを無理に自分から引放してつれて行くいけない人のやうにさへ思ふ事がありました、お祖母さんのその感情は時々妙な皮肉やいやみを含んだ言葉



になつて表はれて、そしてお母さんを苦しめるのでした。

『でもね、電車の乘換へはありませんし、終點から車にのればぢきですから、わけなくゐらつしやれますわ』

慰めるやうにかうお母さんがいひました時お祖母さんは

『どうして〱こんどはもう行けやしないよ、そんなに遠くではね』

と一層強い調子で云つてくるりと長火鉢の方へ向きかへつて煙管をとりあげるのでありました。

お母さんは今上京する前のそのお祖母さんの不機嫌な顏や、皮肉な言葉なぞをあり〱と思ひ浮べました、そして思はず暗い顏をいたしました。お父さんにお留守居を願つて菊見になぞ行くといふ事が大變すまないやうに思はれもいたしましたが、けれど都合が惡くて行かれないと云ふのはお祖母さんに對してあまり氣の毒なやうにも考へられました。

『お天氣だといゝのね、坊や』

却てこんな言葉が無意味にお母さんの唇を洩れました。

その十五日の朝お母さんとねーやとはいつもより早起きをしてお掃除をしたり、外出着を揃へたり、おひるのおかずを煮たりいたしました。太郎さんがいつものやうに夜具の中から兩腕をぐいと延して欠伸をして、そして目を覺しました時は糸織の着物や絹のおちやん〱や紫色のかわいゝお



守り袋なぞがちやんと枕もとに揃へてありました、そしてお茶の間には人待ち顔に朝の食卓が出來て居りました。

「はやく御飯を頂いて朝の御用をすまして」

とお母さんはせわしなさうにつぶやきました。そして太郎さんのおべゝをきせたり、お床を疊んだりいたしました。けれどもいつも朝寢坊のお父さんがまだ眠さうな顔で起き上つて枕もとの眼鏡をとらうとするのを見ますとお母さんは急にすまないやうな氣がいたしました。

「今頃オバアサンはお支度で大變だらうね、太郎ちやん」

まだ寢卷のまゝ太郎さんを抱きあげてかうお父さんはいひました。朝機嫌のいゝ太郎さんはお膝の上で兩足をばた／＼させながらきやつ／＼とはしやいで、お父さんのお鼻を摑んだり、お口の中へ手を入れたり、お耳を引つぱつたりいたしました。

「これ／＼君は實に亂暴だね、眼鏡は御免、御免ですよ」

とお父さんは少し閉口の氣味でお膝から太郎さんを下しました。

「おひるのお支度はお戸棚の中に、それから牛乳とお菓子がお茶だんすの上の戸棚に御座いますからね」

御飯がすんであと片付もすんで、すつかりお支度が出來上つた時、お母さんはかう申しました。



『では行つてまいります』

『行つてゐらつしやい、オヂウサン、オバウサンによろしく』

ふくら雀のやうな格恰をしてねーやの背中へおんぶをした、太郎さんを覗いてお父さんは笑ひました。可愛い丶乳歯を見せて太郎さんも笑ひました。

一時間の後に太郎さん達は兩國ステーションの出口に立つて着く汽車を待つて居りました。途中の電車の中であまり人がこみ合つたために、機嫌を惡くしてぐずりました太郎さんの頬には涙の痕が見えました、そしてお手々にはウエフアの粉がついてゐました。

『おむつが濡れたらうがね』

とお母さんはサモ〳〵氣になるといつた風に申しました。けれどももう太郎さんをおんりさせるには時間がありませんでした、時計は豫定の十時半を五分も過ぎて居りました。やがて汽車がついたものと見えて向ふのプラツトホームの方が俄にさわがしくなつてきました、人の足音が聞えてきました、そして驛員は改札口の戸を開けました。

なるたけ人の邪魔にならないやうな隅の方にたゝずんで、太郎さん達はあとから〳〵出て來る群集の一人々々を眺めました、お祖父さんもお祖母さんもそれから外の叔父さん達も皆大變に肥えた人で歩くのは遲いのでしたから最初はそれらしい姿がみつかりませんでした。もう殆ど皆出てしま



つて、一番おしまひに數人の人々が前後して出て來ました、その中にみえなければもう來ないのださお母さんもれーやも思ひました。

『ほら、あすこにお祖父さんが、草刈の叔父さんも、おや叔母さんも、金杉の叔父さんも叔母さんも……』

かうお母さんは上ずつた聲で云つて向ふの方を指さしました、そしてなほしきりに眼で探しました。

『お祖母さんは、……オバサンはどうなすつたんだらう』

『ほんとにまあ、おみえなさいませんこと』

とれーやも呆れて眼を見張りました。

『どうなさいましてお母様は？』

お祖父さんが改札口を出るのを待ちかねてお母さんは挨拶よりも先きにかうたづねました。

『來るつもりで支度したんだが、昨夜から少し咽喉が鳴るつて、止めにした』

『なあに、大したことでは御座いませんがね、もし出先きで持病が起るとこまるからつてお用心なんで御座いますよ、ほんとにお祖母さんがゐらつしやらなくちや張合がおありなさいませんわね御苦勞樣でしたのね、わざ／＼遠くまでお出かけで』



「まあ、左樣でしたの」

調子のいゝ草刈の叔母さんの言葉に答へる方角もなく、お母さんはあまりの意外さにしばらくはたゞぼんやり立つばかりでした。もう菊見などはどうでもいゝ、このまゝすぐ歸らうかとさへ思ひました。けれどそれは叔父さん叔母さん達へ對しても出來ない事でありました。

「さあ出かけませうか」

それ〲挨拶がすんで後お祖父さんはかう云つて眞先きに歩き出しました。今日の御案内役はお祖父さんなのでした。

「まあよくおふとりになつて、まあかわいゝお顔をして」

歩きながらにも叔母さん達はおんぶされてゐる太郎さんを覗いてかうお愛想を云ひました。お母さんは太郎さんがぐずらなければいゝとそればかり氣になりました。けれど太郎さんはこみあつた電車を下りてから後ずつとおとなしうございました、國技館の入口の赤い提灯を見ますと」おうおう「といつてよろこんで手を延しました。

「まあ立派な菊ですこと」

「どうしてこんなに咲かせますでせう、これは飛行器……自動車……これは何の形で御座いませうね」



初めて菊を觀るのだといふ叔母さん達や、ねーやはかう感嘆の言葉を並べながらお祖父さんや叔父さん達のずつとあとになつて歩きました。人はあんまりこみあひませんでした、でお母さんはほつといたしました。お母さんは菊を觀るよりも何よりもたゞ群集の中をつれ歩いて太郎さんに惡い空氣を吸はせるのが氣になつてなりませんのでした。なるべくならお母さんはこんな人ごみの中へ太郎さんをつれて來たくないのでした。たゞお祖母さんがどんなに太郎さんを見たくてお出でなのかと思ふために、しひて出かけて來ましたお母さんにとつてはけふの菊觀はまるで狐につまゝれて歩いてゐるやうなものでした。那須の與一が扇を射るところのあの名高い場面や壺坂靈驗記やお染久松や細川血達磨やのそれ〴〵趣向を凝らした場面が、お母さんにはたゞ俗惡なものとしか眼に映りませんでした。早く出口へ出ればいゝと左様思ひながら歩きました。それにはじめおとなしかつた太郎さんが二つ三つの場面をこえるともうソロ〳〵飽きてぐずり出しましたので、お母さんの足は一層早くなりました。一番おしまひの八段返しがすむのを待ちかねてお母さんとねーやはまつさきに出口へまいりました。そしておみやげのお菓子や玩具をいろ〳〵並べた店の前に立つてあとから來るお祖　さん達を待ちました。

『さあこんどはお晝だ、與平がいゝだらう』

かうひとりでのみこんだやうに云つてお祖父さんはまたさきに立ちました。皆はゾロ〳〵とその



あとについて、細い横町を入つて、與平の玄關をあがりました。玄關には一つの鳥籠がおかれてあつて、中に一羽の鳥が猫の啼き眞似をして居ました。それを聞くと太郎さんは忽ちよろこびの聲をあげました。

「ほんとにお祖母さんがゐらつしやいましたねえ」

二階の座敷へあがつて各々が座につきました時、草刈の叔母さんはふと詠嘆するやうな調子でかう申しました。ねーやの背中から下された太郎さんはやつとの思ひで、自由な體になつたのがサモ〳〵うれしいと云つた風にきやつ〳〵といつて廊下を這ひまわりました。

「さあ、たつた、たつたをして御覧」

「こんぢはは、坊ちやん」

お母さんとねーやは丁度お猿を踊らせるお猿つかひといふ格で、太郎さんに藝をさせました、自動車ブーもおとうふやもお馬ヒン〳〵も太郎さんは上手にいたしました。

「まあなんてお利口でせう！」

と叔母さん達はそのたんびに感心いたしました。

「太郎さんには玉子燒をどうか」

女中がおあつらへをきゝにきました時お母さんはお祖父さんにかう申しました。



「お祖母さんがゐらつしやるとよかつたに……」

やがてお膳が運ばれて香ばしい食物の匂ひがいたしました時お母さんはふと左様思ひました。味のいゝお茶腕のお汁を吸ひながらにもしみ〴〵それを考へました。割箸でお膳をたゝきながられ―やに養つて貰つてゐる太郎さんの姿を見ますと一層それを感じました。

「家はお父さんが留守居かい、ぢやおみやげをあつらへよう」

とお祖父さんは申しました、そしてお祖母さんへのおみやげと一緒にこしらへさせました。

與平を出ましたのは一時半頃でした。そしてお祖父さん達は二時の汽車で歸るといふのでした、そして太郎さん達には、最早停車場へ来なくともいゝ、ずつと歸るやうにとお祖父さんは言ひました。

「でもあんまりあつけなう御座んすわ、停車場までまいりませう」

かうお母さんは申しましたけれども、叔母さん達も口をそろへてたつてそれには及ばないと、いひはりました。でゆきゝのはげしい電車通りに立つて皆はさよならをいたしました。これで今日の歡樂も終つたのかとしみ〴〵物足らない思ひに打たれながらお母さんは

「さあ坊や、はやくおうちへ歸らうね。」

といつて太郎さんを覗きました。太郎さんはおとなしく默つてぢつと空の電線を視て居ました。

編輯を終りて

今年の三月に生れた此の雜誌もいよ〳〵此處に始めての新年を迎へます。足らぬがちの世帯で育てゝゐる子供が兎に角く年を重ねて行くと云ふことは育てゝゐる者の身にとつては嬉しいことに相違ありません。

「冥土の旅の一里塚」に私共が到着するだけで後に何もが殘らないならば人生は隨分淋しいものでありませう。けれども、額に一筋づゝ皺が殖へて行くと同時に一方に自分自身の延長であるものが育ちつゝあると思へば決して淋しくありません。肉體が追々に衰へるに比例して其れだけづゝ精神化して行つて、そして、精神的の活動範圍が追々に擴がつて行つて、ツイに自分の肉體が亡びた後にも、自分の精神的の仕事が後の人の幸福の土壤の、たとへ、ハシクレにでもなると思へば「冥土の旅の一里塚」も本當に愉快に眺められます。

今日（十二月十二日）「國民婦人會」へ招がれまして一寸したお話をして來ました。二百人計りの會員の方のの中には丸髷があり島田がありと云ふ風でしたが、此の暮の忙しい時、殊に寒い雨が降つてゐるのにお出かけになつて、そして、思想問題に觸れようとなさる御熱心を見ていよいよ我が國の婦人達も動き出したと云ふように感じました。

婦人達が動き出した此の時に、婦人の力が大波のように上がつて來た此の時、其の力の趣く方向が一歩誤まつたならば、結果は大變なことになります。來る新しい年も新時代の婦人がとらねばならぬ道を明らかにするために、いざ、勇敢に戰ひませう。御援助の程を御願ひ致します。

本誌定價表

一冊	金二十五錢	送料五厘
六冊	前金 金壹圓四十錢	（送料共）
十二冊	前金 金貳圓七十錢	（送料共）

[redacted]誌代及郵税は前金の事[redacted]郵券代用は五厘切手にて一割增[redacted]廣告は御照會次第御相談いたします

大正九年十二月二十三日印刷納本
大正拾年一月一日發行

編輯兼發行人 東京四谷區南伊賀町四一 山田嘉吉

印刷人 東京神田區仲猿樂町十七 大杉直次郎

發行所 東京四谷區南伊賀町四一 婦人と新社會社
振替東京五三六八八

シュライネル夫人著
山田わか譯

—女性生活の文典—

若き愛と智の眼覚

エレンケイと共に婦人思想家の雙璧である原著者壯年時の力作。眠れる同性に對する切なる愛憐は、豐かな想像と華やかなペンとに依て、茲に十餘篇の上品な夢物語に脚色され、我國姉妹に取つても自己現前の問題を意識し性と叡智とに眼覚める唯一の聖典となりました。

中判二四〇頁
装幀極めて清洒
定價壹圓廿錢
郵税金六錢

元讀賣新聞身上記者
大月高陽著

—深刻な人間苦研究—

婦人の煩悶

著者曰『我國今日の婦人が各自の苦惱から、何ういふ風に罷脱し超越しようとしてゐるか私は此著を通じて彼等の歎かざる告白を世に紹介したい。特に婦人自身には其の苦惱解決の爲に又光明ある生活への指針として敢へて本書を提供する。』

四六判二八〇頁
定價金壹圓廿錢
郵税金六錢

文學博士
西晋一郎著

—國民道德の眞意義—

普遍への復歸と報謝の生活

謙虚自然なる博士の文想は醴泉地に湧き嘉禽空に歌ふが如し。茲に多年の思索と體驗とを傾盡して我國民の道德的創造と生活とに對し、前人未言、唯一徹底なる哲學的宗教的解釋を下せり。學者文人宗教家、將た苟も個我の平靜を得ざる者は、來つて卷中の靈泉を汲まずや。

四六洋綴金字入
索引付二九〇頁
價貳圓郵税六錢

東京市牛込區新小川町一五一
株式會社日本社發行
振替口座東京三〇二六五番

新刊二種

◆米國商學士 京都府囑託 宮川節郎氏著

米國の裏おもて

本書は在米多年、彼國上下の社會事情に精通せる著者が米國及米國人の眞相を遍く我國民に紹介せんが爲め提供したるもの、觀察奇警叙事流麗、詩趣横溢して興味津々、北米の風物人情躍如として紙表に生動す、今や排日案通過して日米の問題益々紛糾ず、我國民刻下必讀の好著也。敢而薦む。

總洋布上製箱入
特價一圓四十錢
送料八錢

◆山田わか女史新著

社會に額づく女

我が子の病に脅えるやうに世の中の惡德に戰慄し、我が子の幸福を喜ぶやうに世の中の善に跳る心の努力に依つて近時の社會問題及婦人問題を論じたるもの、一貫するところは社會奉仕の精神を高唱力說するにあり、婦人界の新聲として朝野識者の注意を惹起し好評既に嘖々たり。

四六版四百廿頁
定價二圓三十錢
送料十二錢

東京市麴町區平河町六丁目
耕文堂
振替口座東京三四六六七番